

クンちゃん、お帰り！

大森まさ子

月下美人のつぼみが膨らんできた。月下美人の葉っぱは、昆布のように細長く肉厚だ。そのギザギザの所に米粒のようなつぼみが付く。そのつぼみはゆっくり長く伸び、先の方が膨らみ、それが子ども拳ほどの大きさになると首をもたげ始める。開花は近い。「もうすぐ、クンちゃんが帰って来るよ！」と娘に声をかける。

「クン」は、次女が小学生のころもらってきた犬の名前である。乳離れしたばかり、パグとシバとの雑種で、メスだった。玄関の下駄箱の下に置いた小さな菓子箱が、彼女の最初の寝床だった。一晩クンクン泣いた。だから、名前はクンクン。クンちゃんになった。クンはいつまでも、クンクン。ある日、「キャン」と鳴いた。「うわ、キャンと鳴いた！」。やがて、ワンワンとほえるようになった。やや小ぶりの元気な犬に育った。初めは庭の犬小屋で過ごしていたが、いつの間にか室内犬になっていた。

クンは甘えん坊。家族大好き、郵便さんも宅急便さんも近所さんも大好き。でも見知らぬ来訪者には番犬であった。夫と並んで昼寝をし、娘がピアノを弾けば足元で丸くなる。夜の家族の団らんには必ず割り込んでくる。体を寄せ、頭や体をなでてもらって寝息をたてる。上の姉兄とは年の離れた次女にとっては、かわいい妹分であった。

私はクンを育てて、犬、いや、子どもはこんなにも甘えたいものなのかと驚いた。ほとんど甘やかすことの無かった私の育児を振り

返った。もっと、もっと、甘やかして育てても良かったのではないかと思った。

しかしクンはノラになるわけではなく、ずっとわが家がかわいがられて暮らしていける。子どもたちはそうはいかない。やがて、進学、就職して家を出、自立しなければならない。仕方ない……。そう納得させた。

次女が大学に進学した年の夏、クンは病気になった。夏休み、やとと帰省した次女を待つて、クンは死んだ。

クンが死んだ日の夜、月下美人の花が咲いた。その月下美人は次女が高校生の時にもらってきた。二、三年したら花が付くよと言われていたが、すっかり忘れていた。その晩初めて大きな白い花を開いた、強い香気が家中に広がった。そして翌年、クンの命日に二度目の花が開いた。月下美人はクンちゃんになった。

それから20年、クンは毎年、帰って来る。今夜は咲きそうだ。夜の9時ごろからまだかまだかと待つ。10時すぎ、甘いにおいと共に花が開いて来る。

「クンちゃん、お帰り！」

(おおもり・まさこ)岡山県エッセイストクラブ会員、倉敷市在住)

2018年9月20日山陽新聞夕刊掲載